

連載  
講座

第36回

## チリがなければゴミ捨てぬ・河合寸翁

作家 童門冬二

### 問題児を自分の部下に

よく聞く話だが、  
「町がきれいだとポイ捨てをするのが気が咎める」とか、  
「たとえ百円でも入園料を払うと、公園の中でゴミを捨てる気が起らない」  
などという話を聞く。これは人間の心理が環境に支配されて、普段なら何気なくやってしまうことがやりにくくなるということだ。つまり、  
「状況が人間の行動をセーブする」ということだ。確かにそうかもしれない。

歴史にもこんな話がある。姫路藩は、酒井という大名が治めていた。幕末のころ、この姫路藩に河合隼之助（かわい・はやのすけ）という家老がいた。学者なので、号を寸翁といった。姫路城は白鷺城という別名を持っている美しい城だが、この城の麓に小さな神社がある。これが河合神社で、寸翁を祀っている。日本でもこういう例は珍しい。藩主の拠点である城の根っこに、家老を祀ったお宮を付置させているのだ。河合寸翁はそれだけの功績を挙げたのだ。

かれは、城内の問題児を一手に引き受ける、という人事の達人でもあった。いろいろな部署で、  
「うちにいるAは始末に負えない。好き勝手なことをして扱いにくい」とか、  
「うちのBは、上司の命令に従わないので職場で

悪い影響を与えている」などという不満や苦情が起こると、河合はそれぞれの責任者を呼んで、

「AとBをおれのところに寄越せ」という。つまり家老というのは総務部長的立場にあるから、

「城内の職場で扱いに手を焼いている連中は、一まとめにして自分の所で預かろう」ということなのだ。各職場は喜んだ。河合の部下は、城内の問題児のシェアが非常に多くなった。しかし河合はそういう連中を鮮やかに使った。かれは、

「始終城下町に行って、民の暮らしぶりを観て来い。おまえたちは、そういう連中の納める税によって生活しているのだから」と命じた。問題児たちは喜んで城下町へ出掛けて行く。

悪い遊びをする者もいた。しかし河合はそれが報告されても別に咎めない。同じ管理職がそういう河合に、

「河合さんはちょっとおかしいよ。もう少し問題児に厳しくしてください」と苦言を呈する。河合は笑う。

「もとはといえば、おまえの職場で厄介視するからわしが引き取ったのだ。問題児の扱いは慣れている。文句を言うな。長い目で見ている」と言い返す。

確かに問題児たちの使い方は河合はうまかった。

町に行かせたのは、いうところの“下情に通じる”である。治められている民がどんなことを考えているか、何を求めているか、そういうニー

ズ（需要）や、不平不満などを知ることによって、河合は姫路藩政の方向を定め、また細かい施策を考えるのだ。

いわゆる“苦労人としての治政”を考え出すのである。

## 城下町をきれいに

河合が特に力を入れたのが、「城下町環境整備とその保全」であった。一言でいえば、「姫路の町をきれいに保とう」ということである。「そうすれば、一般の旅人も、あるいは大名の参勤交代の行列も、ゴミを捨てたり、火を出すような不注意なことがなくなる」ということだった。この河合の考え方を、わかり易く城下町の宿や飲食店、あるいは馬方、飛脚などの、人流や物流を扱う店などに告げて歩く。ふんぞり返った役人ではなく、時にはバカをして無駄な金を使う問題児たちだから、町の商人たちも悪くはとらない。

姫路の城下町はどんどんきれいになって行った。そうなるに参勤交代でここに宿泊する大名の行列も、

「姫路の城下町ではうっかりしたことはできない」と互いに注意し合うようになった。河合は喜んだ。そして町にべったりはまり込んでいる問題児たちを呼んで、

「大名家で、一番姫路に協力的なのはどこの藩だ」訊く。問題児たちは口を揃えて、

「それは薩摩藩です」と答える。薩摩藩には調所（ずしよ）笑左衛門という家老がいて、茶坊主出身だそうだが実に細かいところに気がついて、

「姫路に宿泊中には、ゴミは必ず一か所に集める。火の元に気をつける。間違っても、薩摩藩が火を出したなどと言われてはならぬ」と厳しく注意しているという。調所は、

「姫路藩には立派な人物がおられるに違いない」と、常に部下に言い聞かせているという。河合はこういう報告を聞いて嬉しかった。自説である、

「町が清潔なら、絶対に汚いゴミは捨てない。同時に、火事も起らない」

という信条を理解し、調所という家老が立派にそれを実行してくれたからである。河合はまだ見たことのない調所に親近感を覚えた。これは調所も同じだった。参勤交代やあるいは商人に金を借りるために大坂へ行く度に、調所は必ず姫路に泊まった。そして清潔な町を見ては、

「姫路藩の御家老はまだご健在だな」と思った。ところがこの調所が思わず眉をひそめるようなことが起った。それはある日大坂へ金策に行った帰り道に例によって姫路に泊まると、どうも町の様子が違う。清潔な町が多少汚れている。ゴミもあちこちに散っていた。そこで調所は宿の主人に訊いた。

「河合殿に何かあったのか？」

調所はすでに宿の主人から姫路藩の家老が河合隼之助であることを知っていた。そして河合の指示によって、問題児たちがイキイキと仕事の場を得て、町の人々と一緒になって町の清掃・整備などに努力していることを知っていた。

「河合隼之助」という名は、調所笑左衛門の頭脳の中にはっきりと打ち込まれていたのである。

だからここへ来る度にきれいな町を見ては調所は思わず城に向かって、

「河合殿、おぬしやるな」

と呼びかけた。

宿の主人は暗い表情で言った。

「御家老の河合様は、先日お亡くなりになりました」

これを聞いて調所は、やはりそうか、と腕を組んだ。やがてぱらりと組んだ腕を解き、城に向かって手を合わせた。そして、

「敬愛する河合殿、ゆっくりお休みください。今日まで、本当にご苦労様でした」

と心からの冥福を祈る言葉を告げた。しかし河合が死んでも、残された問題児たちが中心になって、「姫路の城下町を常にきれいにしよう」という活動は絶対にやめなかったという。